



火葬場の拾骨室で 示されたこと

クリエイション・リサーチ・ジャパン
顧問

野口 誠

先日、火葬場の拾骨室で拾骨の係りの方が、集まった人々を前に、ひとかけらの骨を手にして、そこにあいている穴を指し「みなさん。この小さい穴はなんだかわかりますか。これは耳の穴なんです」と説明してくれた。

いったい、あの穴はだれがあけたのか。音が聞こえるように耳鼻科の医師が手術であけたのか。そうしたからといって聞こえるものではない。はっきりしていることは、耳の穴は、その中に空気の振動（音）が入るためにあるのである。しかし、それだけではない。音を捕えてそれを反射させ耳孔に入り易くするために、顔の両側に耳介まで突き出ている。そしてその音は外耳道を通して鼓膜に達する。さらにその振動は鼓膜によって電流となり、脳に伝えられ、音として聞けるのである。

進化論によれば、それは偶然に自然発生したことになる。しかし、はたしてそうであろうか。耳は空気の存在を前提にして設計されていることは明らかである。

あるものの存在を前提にした設計は、知性のある設計者の存在を想定させる。生きものが口や鼻で吸わなければ生きてはいけない空気、それがなければ耳で音が聞けない空気、それがなければ鳥が空を飛べない空気は、神による創造の二日目に造られている。「神は『水の中に大空があれ』と言われた」（創世記1:2）が、その「大空[ヘブル語でラキア]」は大気を意味し、空気のこと

である。呼吸する生き物は、すべてこの空気の存在を前提にして設計されている。

製造目的について考えると、メガネにしても、ペンにしても、イスにしても、造られたものには、それが造られた目的がある。言い換えれば、存在に目的があるものは造られたものであると言える。聖書には「聞く（目的がある）耳と、見る（目的がある）目とは、それら二つともまた（他の器官のように）主が造られたのである」（箴言20:12）とある。主とはイスラエルを選んだ聖書の神で、創造者のことである。さらに聖書には「耳を植えた方は聞くことをしないでだろうか。目を造った方は見ることをしないでだろうか」（詩篇94:9）とある。

神が神の似姿に人を造ったのが、霊的側面だけでなく、身体的側面でもあることは、神の人の姿をとっての顕現から容易に推測される。神は、神に背いたアダムとエバに現れるのに目に見えない霊としてではなく、歩けば足音のする人の姿をとって現れた。神は、人として顕現されたゆえの制約のために「あなたはどこにいるか」と呼びかけて隠れている二人を探し求めなければならなかった。

神が人の姿をとったことの極致は、「ことばは、肉体となって私たちの間に宿った（ギリシア語「天幕を張った」）（ヨハネ1:14）である。さらに神から身を隠している二人を探し求める姿こそ「人の子が来たのは、失われた者を尋ね出して救うためである」（ルカ19:10）と言われた主イエスの姿を予表するものである。「今この所にささげられる祈りにわたしの目を開き、耳を傾ける」（歴代誌下7:15）というみ言葉は、今も生ける可視的な目も耳もある、神人であられる復活の主のことばの予表である。「今この所」とは各自の祈りの場であり、主が地方教会成長の一助とするべく備えられた東京プレーセンターもまた「今この所」の一つである。